

前田勝洋の教育観に関する研究
-ライフヒストリーからみる教育観の形成・転換に着目して-

岩田 龍明
(愛知教育大学大学院 教育学研究科)

How does a great teacher develop his pedagogical perspective?
- From case study of Katsuhiko Maeda and his Life History -

Tatsuaki IWATA
(Graduate Student, Aichi University of Education)

はじめに

近年、教師のライフヒストリーに関する研究に焦点が当たっている。例えば、岩崎(2007)が取り組んだ、遠藤隆宏氏と芳山小学校の学校文化との出会いによる、教育観の「転機」の事例分析や、森脇(2007)が行った、元奈良女子大学文学部附属小学校の教諭である小幡肇氏と、奈良女附小の学校文化との出会いによる、授業スタイルの「転機」についての研究である。これらの研究は、一人の教師の個人的歴史的な文脈と、その教師が属した学校文化との関わりから、教師の「転機」について考察した研究である¹⁾。

以上の研究とは少し趣向の異なる研究が、船越(2011)の研究である。船越は、和歌山大学教育学部に所属し、地域で活躍する教師に焦点を当てている。それにより船越は、地域が育んだ教育風土を、一人の教師のライフヒストリーから明らかにしている²⁾。

これまでに挙げた二つの研究の共通点は、一人の教師のライフヒストリーを詳細に聞きとり、そこで得られた語りと学校文化及び歴史的背景を照らし合わせながら、教師の育つ道筋を明確に表そうとする点である。

そこで本稿では、愛知県で活躍する一人の教師を取り上げる。その人物とは、前田勝洋である。前田は、現在主に愛知県三河地方で、子どもに寄り添う授業づくりの講師として活躍している。前田は、1942年生まれ、愛知学芸大学を卒業後、1965年より教職の道を歩み始める。1978年より愛知教育大学附属岡崎小学校(以下、附岡小と記述)に勤務し、専門の社会科を中心に実践を深める。その後、教育委員会、管理職を経験し、学び合う学校づくりを行うことで、子どもに寄

り添う授業づくりの方法について、後進に指導していた。

本稿では、ライフヒストリーの研究手法を援用し、前田の教育観の形成と転機について明らかにすることを目的とする。

1 ライフヒストリー研究の特徴と方法

ここではまず、ライフヒストリー研究の特徴と手法について、先行研究から明らかにしていく。

1.1 ライフヒストリーとは

ライフヒストリーとは、インタビューによる聞きとりを基に作成したドキュメントを編集して作成するものである。

ライフヒストリーを用いた研究は、1920年代に社会学における研究から徐々に発展していく。高井良(1994)によると、トーマス・ズナエニツキ『生活史の社会学-ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』が、ライフヒストリー法発展の画期と記されている。その後ライフヒストリー法は、心理学や文化人類学等の社会学とは異なる学問領域でもいくつかの成功をおさめたのちに、1980年代より教育学の領域においても注目され始めた。それは、イギリスにおける教育研究と教師の現実世界との乖離が指摘されたことが始まりであるとしている³⁾。日本でのライフヒストリー研究は、1977年に刊行された中野卓編著『口述の生活史』を筆頭として、社会学の分野から研究が進められてきた。

1.2 ライフヒストリー研究の特徴

ここでは、ライフヒストリー研究の特徴について『ライフヒストリーの社会学』(中野卓、桜井厚編著、1995年、弘文

堂)を参考にしながら記す。

佐藤は『ライフストーリーの社会学』の中で、ライフストーリーを構成する概念として〈個人〉〈生活〉〈口述〉の三つを挙げている。ここでは、三つの概念について述べながら、ライフストーリーの研究対象となるものについて記すことで、この研究手法の特徴を示している。

佐藤は、ライフストーリー研究について「根源的な可能性の第一の焦点が、個人というフィールドの自覚化にある⁴⁾」と述べている。これは、社会学における〈個人〉がこれまで全体や社会と対立的に捉えられていたことに対して、〈個人〉を社会の様々な事象との関係が「複雑に集積する〈場〉」と捉えることに言い換えられる⁵⁾。つまり〈個人〉は「社会が複雑で多層的な構成体であると同じように、じつは個人もまた複雑で重層的な存在⁶⁾」と認識することが、社会学においてライフストーリーが個人に焦点を当てる理由である。

次に〈生活〉について述べる。ここで言う生活は、個人の日常生活である。そしてその生活は、「歴史的・社会的な基底力が刻み込まれている⁷⁾」生活でもある。このような生活について個人の言葉で語られた「人生」を用いることは、「見通しにくい「私」＝個人の内側に入りこみ、追体験的に検討しようとするとき手がかりとなる⁸⁾」と記されている。ここからライフストーリー研究では、個人の生活を共同研究者が追体験することにより、その個人を基底する何かを意味付けることができると言える。

そして最後に〈口述〉である⁹⁾。〈口述〉についてここでは、①現存性②主体性③現場性の三つの性質が示されている。①現存性は、話し手の語りは、話し手が「いま」という時間に、聞き手との相互作用によって「ここ」でまとめられる、〈いま-ここ〉の物語であることを示している。②主体性は、語るという行為が、語り手の「なんらかの自発性」をもった行為であることを表している。この②主体性は、③現場性とも関係している。ライフストーリーの聞きとりは③現場性のもつ「相互作用の存在」が重要であり、語りは聞き手がいてこそ初めて語られることを意味している。

以上の記述からライフストーリー研究は、個人の生活を対象に相互作用的な聞きとりを行い、その記録を編集して、個人を基底する何かを明らかにすることができる手法だと言える。

2 前田勝洋のライフストーリー

ここからは、前田勝洋へのインタビュー記録や著作からの

引用に基づいて、前田勝洋のライフストーリーを記述する。ここではライフストーリーを記述しながら、《 》を用いて前田勝洋の教育観の中核となるキーワードを抽出する。

なおここでは、筆者が前田本人に行ったインタビュー記録を用いる。インタビューは合計四回行っており、それらは2012年5月17日午前9時半から11時(第一回)、2012年11月23日午後2時から午後4時(第二回)、2013年8月23日午後2時半から5時(第三回)、2013年12月11日午後12時45分から15時15分(第四回)に行った。インタビュー記録を本稿に記述する際、文意の変わらない範囲で、「……」を用いた文の省略、括弧()での加筆や一部文の修正を行っている。

合計四回のインタビューでは、前田には幼少期から現在に至る全てのライフストーリーを話して頂いたが、本稿では前田の修学期から附岡小での勤務までのライフストーリーを記述する。それにより、前田の教育観の根底を担う経験や、教育観の転機となった出来事について明らかにする。

2.1 修学時代(1942-1965年)

2.1.1 幼少時から小・中学校時代(1942-1958年)

前田は1942年(昭和17年)、農家の家庭に生まれた。彼が小学校に入学したのは、終戦を迎えた後の1949年で、ちょうど新制の教育制度が整い始めた頃である。前田は幼い頃から病気がちであり、貧しいながらも通院を繰り返していたという。

通院しながら通い始めた小学校での辛い経験について、前田は著書で次のように述べている。

表1

それは私が小学校四年生のことでした。担任教師ではありませんでしたが、ある日、私たちの教室へ一人の若い男性教師が入ってきました。そして、「みんなの中で薬の好きな人はいるか?」と聴きました。……その教師は、「そうか、前田は薬が好きか、あんな苦いものが何で好きなのか。」と行って笑い出したのです。……私は、その日から、「クスリニンゲン」というあだ名を付けられ、「いじめ」の対象になったのです。女子も男子も先生がいないうとき、学校帰りに「クスリニンゲン、クスリニンゲン」のはやし立てる声に耳をふさぎながらにげるように帰ったのです。ひどく暴力を浴びせられて、「弱虫、クスリニンゲン」と言われてしまったのです。

『ホットでほっとな学校づくり奮闘の記』、272,273頁より引用

この後に続けて、中学校での同じような経験について次のように述べている。

表 2

校医さんの一斉検診があります。広間に上半身裸になって横一列に並ぶのです。……そんなとき、必ず私のところへ、つかつかと来て聴診器を当てました。ほかの生徒は私に聴診器を当てる様子を興味深そうに見ています。「この子は腺病質ですね。それに心臓弁膜症の疑いがあります。」と傍にいる担任に告げます。……みんなの好奇心にさらされながら、金縛りにあっていました。

『ホットでほっとな学校づくり奮闘の記』、273 頁より引用]

これらのいじめや人権侵害ともいえる経験が、前田の教育観の根底を支える《弱者の立場に立つ》という志向を形成していると捉えられよう。

前田は将来的には教職への道を歩むことになるものの、中学を卒業後は自身が農家の長男であることから、安城農林高等学校へと進学した。

2.1.2. 高校時代(1958-1961 年)

前田が高校に入学した 1958 年の前年には、ソ連が 1957 年に初めて人工衛星であるスプートニクを打ち上げたことが話題となり、最新の科学の成果を教育の内容として取り扱う教育内容の現代化へと向かおうとする時期である。教育の動向としては、1957 年に東井義雄が「村を育てる学力」を出版、1958 年には「社会科の初志をつらぬく会」(以下、「初志の会」と記す)が結成されるなど、教育内容の現代化とは反する動きが現れる時期でもある。

高校時代には、1959 年の 9 月に発生し大きな被害をもたらした伊勢湾台風が、人生を大きく左右する出来事となった。前田は当時の状況を次のように、述べている。

インタビュー1

伊勢湾台風が一つ大きなきっかけで、まあ農業がめちゃくちゃにされちゃって、まあ農業やれないなって(思った)。……農業がくしゃくしゃになって、まあ農業で生活していくのはえらいなっちゃうことになって(しまった)。

[2012 年 11 月 23 日のインタビューより]

さらに、この当時の生活を振り返って前田は、次のように

語っている。

インタビュー2

農業というのは惨めだったんだね、とにかく。儲からないし、貧乏がつきまるとってね。なんか家庭も暗いしね。なんかそういうふうで惨めな思いが強くなって……

[2012 年 11 月 23 日のインタビューより]

この当時の生活の様子に追い打ちをかけるように、1960 年に発足した池田内閣の所得倍増計画が打ち出されたという。

インタビュー3

当時は会社員、会社に勤めとる人はどんどん給料があがって行って、……所得倍増計画というくらいで、どんどんどんどんあがっていくのに、農業は貧乏たらしいことばっかだったわけじゃん。儲からへん。……(当時は)サラリーマンにとってはいい時代だと言って、だからみんな安城農林におったわしらみたいな仲間が、みんな農業をやめて、ね。その、会社へ行こうとか……道がかわっていったわけだ。

[2012 年 11 月 23 日のインタビューより]

さらに当時の暗くて惨めな生活について、次のように語っている。

インタビュー4

私の、その高校時代というのは、三年間というのは、とつてもねえ、暗くて辛い時代、だった。なんかねえ……ほんとに青春じゃなくて、ものすごいこう、こう……自分が惨めになったね。

[2012 年 11 月 23 日のインタビューより]

そしてその後、就職の試験を受けるが、さらに進路を変えることになった。

インタビュー5

うちに金がないもんだから就職しなかなっちゃうことで高校出て、国家公務員(初級官僚)の試験に受かって……そこで決まりそうだったんだ。でもそこでその様子を見たときに、……こんなことやってくるのは一生の仕事としていやだなと思ったじゃん。ほいでさてほいじゃあ自分のうち

から通えて、農業の手伝いもしながら、安い月謝で卒業できるっちったら、(愛知)学芸大学(=現在の愛知教育大学)しかなかっただわ。

[2012年11月23日のインタビューより]

以上のように、修学時代の中でも特に高校の時代は《貧しさの中での辛い生活》をした時期であり《生き方の模索》をした時期でもあったと言える。これらのキーワードは、本論文では取り上げないが、後の附岡小での実践単元開発とつながっていくことになる。

2.1.3. 大学時代(1961-1965年)

前田が、愛知学芸大学に在籍した1961年から1965年の間は、池田内閣の所得倍増計画を契機として、日本の経済が大きく変化していった時期である。その中で、1964年には東京オリンピックが行われた。教育においては、生活指導の実践として宮坂哲文「生活指導の基礎理論」(1962)や大西忠治「核のいる学級」(1963)が出版されるなど、生活指導の理論や実践が蓄積され始めた頃である。

前田は大学に入学してからのことを、次のように話す。

インタビュー6

(前田自身が)学芸大学に入ったときも、みんな普通高校からきた子ばっかじゃん。周りは、ほんだもんだから、自分は農業高校出てきたちゅうことで劣等感もあったじゃんね。あんまり勉強してないし、まくれで入ったようなもので。……友達もないし。

[2012年11月23日のインタビューより]

前田は大学入学とともに、友達をつくるために男性合唱団に所属する。しかし、大学二年のとき、「もっと勉強しなければいけない」という思いから退団している。

前田は農業高校を卒業したため、普通科高校の授業とは異なり実習が多かった。そのため前田は、学習の面で自身が周囲の学生より劣っているという印象を強くもっていた。彼はそのため、高校時代から「泥縄式」の勉強方法をとっており、その方法が高校卒業後も身に付いていたと考えられる。

インタビュー7

高校時代のそういう、独学的な勉強のやり方の癖というのは、大学時代にも続いたから……人に言われて勉強す

るんじゃないくて、自分でやるというようなことはあったかもしれんね。

[2012年11月23日のインタビューより]

この独学的な学び方は、後に自身が公立小学校に勤務してから勉強会に頻繁に出向くことにもつながっている。このことから前田はこの時期に、自らが主体的に学ぶ必要性を感じている。ここから自分から進んで学ぶことが、自分の成長へとつながるといふ「『自ら学ぶ』という成長観」を獲得したと捉えられる。

合唱団を退団後前田は、大学の夏休み期間を利用して早稲田大学の集中講義を受講したり、教育に関する著作を読んだりする中で、東井義雄・斎藤喜博・大西忠治・砂沢喜代治らの思想と出会う。彼らの存在を知った前田は、斎藤喜博や大西忠治に直接会いに行った経験もあるという。このように、がむしやりに勉強していた大学生活について、次のように話す。

インタビュー8

そこらへん(=大学3、4年で特に勉強した時期)のことは、その後のね、その後につながる勉強はしてないけど……普通高校のやつらに負けたくないという気持ちは人一倍あったな。

[2012年11月23日のインタビューより]

インタビュー8から「普通高校のやつらに負けたくない」という気持ちが、大学時代に前田を勉強へと突き動かした原動力になっていたと言える。

2.2 新任期から教育観の転換へ(1965-1978年)

2.2.1 新任教師として(1965-1971年)

前田の教師生活は、1965年に始まっている。その中で、教師として歩み始めた前田が最初に勤務したのが、豊田市立旭が丘中学校である。この時期に、前田は大西忠治の集団づくりの実践に興味を示していた。前田は当時の自身の教育について、次のように振り返っている。

インタビュー9

若い時は、短気な血気盛んな叱り飛ばしている教育ばっかやっとな……若気のいたりのようなところがあると思う。ぎゅうぎゅうと引っ張っていく授業(をしていた)。

[2012年5月17日のインタビューより]

インタビュー9 で示した教育を、前田はその後異動した^{ころも} 挙母小学校(前田が二校目に勤務した学校、以下挙母小と記す)まで続けたと振り返っているが、挙母小に赴任した際にある実践と出会い、自らの教育や授業について反省する契機を得ることになる。

2.2.2 初志の会の実践との出会い(1971-1974年)

この時期は、「落ちこぼれ」問題が広がっていった時期であり、1974年には高校進学率が90%を越えた時期である。さらに、「社会科の初志をつらぬく会」(以下「初志の会」と記す)が発足し10年余が経った1973年には、初志の会の会員であった有田和正が、福岡教育大学附属小倉小学校での「小倉の町のゴミ」という実践をまとめた「市や町のしごと」を上田薫監修の基、霜田一敏と共著で出版していることから、初志の会の実践が盛んになってきた時期とも捉えられる。

当時の教育界は、学問の成果をいかに伝えるかという教育が盛んに行われていた。前田はそれと同時期が挙母小に異動しているが、そこでは広岡亮蔵の理論を基にした教材構造や発見学習についての研究がなされていた。そのような中で前田は、愛知県内で初志の会の影響を受けた授業と出会う。その授業は前田が昭和43年(1973年)に参観した、新城市立東郷東小学校(以下東郷東小と記す)、四年生・社会「交通のむかしと今 - 郷土のむかしと今-」(指導者・鈴木仁志教諭)の授業である¹⁰⁾。その授業について前田は「初志の会のような子どもに寄り添う授業」と述べ、子どもの名前が入れられた指導案や、一人の子どもがその授業の中心になっていることを、当時の鮮烈な印象を語っている。前田は、その授業を「これこそ子どもに寄り添って、子どもを生かす授業だなと思った」と確信している。そして前田は東郷東小の授業を、自身の教育観が転換することになるきっかけとして認識している。

「交通のむかしと今」の授業について実践資料には、「この単元では、郷土のうつりかわりを交通の発達のための具体的な姿でとらえ、時代の推移とともにものごとや社会のしくみがかわっていく運動的な捉え方を培う学習¹¹⁾」と示されている。このような地域の歴史の変遷を追う授業について、「子どもが客体(江戸時代の交通)に対し疑問、問題を持ち、主体的に連続し追究がなされる時に成立する¹²⁾」と述べられており、「江戸時代」をどのように子どもの視野に入れ、興味・関心をおこさせるかが、学習成立の前提条件¹³⁾と示している。これらの記述から本授業者の鈴木仁志教諭は、当時の教育の

風潮とは異なる、子どもの興味・関心に寄り添う単元計画を構想していたことが読み取れる。

そして前田が参観した本時の授業は、鈴木教諭がA子の考えに基づいて立案したものである。本時は、全27時間中の7時間目である。これまでに子どもたちは、地域の交通について調べ、実際に地域の古い道道路を見学している。本時は「どんなことがわかり、これからどんなことを勉強するか¹⁴⁾」を考える時間である。

この授業は、地域の道に江戸時代に設置された常夜燈が多くあることに驚き、江戸時代は交通が発達していなかったと思ったが、それが違うのではないかと分からなくなったA子に対して、鈴木教諭が今後の追究を支援するために授業が設定されている。A子は、江戸時代に交通の様子が案外発達していたと捉えているが、具体的にその様子を捉えようとしていなかった。そのため鈴木教諭は、他の子どもの考えを授業で聞くことで自分の考えを補わせることで、A子の今後の追究を支援しようと計画している。

この授業を参観した当時の前田は、挙母小の次の研究の方向性について模索していた時期であった。それまで挙母小では、広岡亮蔵の提唱する理論に基づいた研究が行なわれていたということであった。東郷東小の授業に出会った当時のこと前田は次のように話している。

インタビュー10

広岡さんの研究はね、私が(挙母小)に行った年が研究発表のときで、その年に広岡亮蔵さんたちの、そういう影響を受けた人たちの研究発表は終わっちゃったじゃんね。それから後は、ちょっと空白があって、新しい(研究への)模索みたいなものをしていて……

[2012年11月23日のインタビューより]

インタビュー10から、前田が研究の方向を新しく模索するということは、これまでの研究と前田の考えがずれていたとも考えられる。では前田が東郷東小の授業に出会う前の、広岡の理論に基づいた授業はどのようなものだったのだろうか。前田は、広岡の理論に基づいた授業について次のように捉えている。

インタビュー11

非常にそれ(広岡亮蔵に基づいた授業)は一つの路線に子どもを乗せて学ばせていくという考え方が強いじゃない。

だからそれはね、窮屈なんだわ。子どもをこのように学習させるというなんか、そこにはめ込んでいく感じが強いわけ。

[2012年5月17日のインタビューより]

インタビュー11で前田は、教科の目標に子どもをはめこむような学ばせ方、つまり教材ありきの授業を、窮屈な授業と捉えている。前田は東郷東小の、一人ひとりの子どもの意見や考えを生かしながら行う授業に感銘を受け、自身の教育観を転換させていく。前田は当時の教育観の変化について、次のように述べている。

インタビュー12

教師にとって子どもって思うようにならない存在というか、むしろその子どもたちの持ち味をどうやって生かして授業をするか。こっちがハッとしたことの中に大事なことがあったり、それから子どもたちが思いもよらないこだわりをもっていることがあって、それに意味があるかもしれないとおもうようになったから……子どもたちの意見はあっち行ったりこっち行ったりしながら、なんかこう、まわり道してるような子もいるし、わかったような顔してるのもいるけど、そこんところを待ってやって(授業をした)。

[2012年5月17日のインタビューより]

インタビュー12で前田は、教育観の変化について二点を挙げている。一つ目は、子どもという存在の捉え方の変化である。それは前田が、子どもがある事にこだわることに意味があると捉えるようになったと語っていることから分かる。そして二点目は、教師の在り方に関する変化である。前田は東郷東小の授業で鈴木教諭の、A子が発言するのをじっと待つ姿から、教師の待つ姿勢が重要だと感じている。

前田は東郷東小の授業と出会うことによって、これまでの広岡理論に基づいた授業における子どもの存在が「教えられる」「先人の足跡をたどる」存在という認識だったのに対して、東郷東の授業から「思うようにならない」「それぞれに考えをもつ」存在であるという認識に転換したと言える。この転換には、前田が東郷東小の教師の姿、子どもの学びに共感したからである。

さらに、授業において教師は子どもに知識を「教える」だけでなく、子どもが考えをもてるまで「待つ」ことや、考えをもてるように「支援する」ことも必要だと自覚したと考え

られる。

以上のことから東郷東小の授業との出会いは、前田にとって《「子どもありき」の授業》への志向をもつ契機となったことは明らかである。このことは、次のインタビューからも分かる。

インタビュー13

子どものために授業があるという考え方で、教材のために子どもがいるんじゃないかと、子どものために教材があるという考え方に変わっていったのが(この時期で、そのそういうことを学んで(身につけるために)行ったところが東郷東やら新城やら(静岡の)安東やら(富山の)堀川やら(奈良の)帝塚山(いずれも小学校)にいたりね……そういうことで勉強して、だからその頃に……霜田一敏さんとか日比裕さんとか、いろんな名大の教育方法の先生方との出会いもあったわけだね。初志の会の出会いというのが一つ大きいよね。

[2012年11月23日のインタビューより]

インタビュー13から前田は、教材と子どもとの関係についての捉え方の変化についても話している。ここからも授業は、教材ありきとする考え方から、子どもありきの教材でなければならないという考え方に変化させている。

前田は東郷東小との出会い、そして初志の会との出会いから様々な学校の授業研究会に足を運ぶようになったことも分かる。インタビュー13で前田が挙げた学校はどれも、上田薫や重松鷹泰との関わりのある実践校であり、その歴史は長い。前田は上田や重松の影響を受けた学校から実践を学んでいたことが分かる。さらに前田は、初志の会で研究者たちと出会ってから、名古屋大学で開かれる勉強会にもしばしば足を運びんでいる。

以上のことから前田は、東郷東小の授業と出会い、自身の教材観をも変化させるとともに、その思想の根源となっている「初志の会」の考え方に共感をした。初志の会で前田は、上田や重松、霜田や日比などといった研究者や、新城の初志の会会員として著名な渥美利夫といった実践家と語り合うことで、学びを深めていったと言える。

こうして前田は、教職についてからも《「自ら学ぶ」という成長観》をもちながら、教育への見識を深めていった。

2.3. 実践への意欲の高まり(1974年-1978年)

この時期は、前田自身が最も研究に熱を入れたと語る時期

である。そのことについて前田は、インタビューで次のように述べている。

インタビュー14

30歳前後だったから、その頃はいろいろな、私も研究主任をやったりね。……まあ私が思うのは、一番私が勉強したのは附属に行く前の三年間(附属小学校勤務は1978年から)くらいに、その改めて斎藤喜博だとか東井義雄だとか大西忠治の、それまでのやってきたことや、いろんなものを読み返したり、それから上田薫さんだとか重松さんだとかそういう人たちの本をこう、なんていうかね、附属に行く前の三年間くらいで自分でもすうっごい勉強いたなという時代があったね。徹底してやったというかね。……日曜になると、本当は結婚して子どももおったんだけど、子どもの守もせずに、朝から図書館に行って、本を読みふけて、記録にとどめて、そうやって勉強することに時間を割いたりね。

[2012年11月23日のインタビューより]

前田は大学生の時期に、斎藤・東井・大西らの著作と出会っている。インタビュー14では、彼らの著作を改めて読み直したことを話している。東井義雄・斎藤喜博・大西忠治らの実践を学び直すことは、前田が再び授業研究や生活指導の原点となる理論を学び直すことにつながっていたと考えられる。加えてこの当時前田が、研究主任という立場であったことから、前田が授業づくりや学級づくりについてだけでなく、学校づくりの理論についても関心をもつようになったことが考えられる。これは主に、東井・斎藤の二人に関わることだが、この両者は学校での校長職を経験しており、その経験を実践記録として出版している。この東井・斎藤から影響を受けていることが、前田の教頭期・校長期の実践から読み取ることができるが、本稿では紙面の都合上論じない。

前田は挙母小に1971年から1978年まで勤務をしていたが、後半の勤務期は前田が《「自ら学ぶ」という成長観》の再燃させた時期でもあり、その契機となったのが「初志の会」で実践者や研究者と出会いだと言える。前田は「初志の会」での実践者や研究者との関わりに刺激され、大学生の当時に影響を受けた教育の先達者たちを振り返り、もう一度学ぼうとした。

以上のことから前田は、「初志の会」との出会いや先人たちの記録の学び直しが、前田の教育観を転換させ、そして後

の教育観を形成していることが分かる。

この時期の学びは、研究会に参加したり、本を読んだりするだけではなかった。実践者としても、授業に力を注いで取り組んでいたことが、次の語りから分かる。

インタビュー15

それから、挙母小学校の……最後の三年間ぐらいは、五時間連続で授業を公開したりね。……国語の授業を五時間くらい連続して見てもらったり、社会科で、水島の工業地帯の当時公害やなんかがあった問題を取り上げて、三十時間ぐらいの実践をやったりね。

[2012年11月23日のインタビューより]

インタビュー15から前田は、挙母小の時期から自分の授業を公開し、教室を開く取り組みを積極的に行っていた。このことに加えて、主に前田の専門である社会科で子どもを軸とするような《「子どもありき」の授業》を展開していたことが、次のインタビューから分かる。

インタビュー16

私が附属へ行く前ねえ、……(挙母小で)三年生受け持ったんですよ。で、教科書があるんだ社会科。だけど、私一回も教科書使わなかったの。ほいで子ども連れちゃあね、町歩いたり。で、歩いてきてどうだった?とか、なんか気になる店あった?とかそういうことをやってるだけで、何にも教科書をやらなかったの。そのとき私自身の中にあっただのは、なんかこういう店があるとかこういうことをやるといふのを教えるのが社会科じゃなくて、見る力というか、見つける力というか、そして自分なりに解釈するといふか、どう思うかと思える力というか、それをつけてやるのが本来の社会科の学力じゃないか。

[2013年8月23日のインタビューより]

インタビュー16から前田が、当時の授業で何を大切にしていたかが分かる。インタビュー16の波線部から、前田が授業に町を実際に歩くという体験的な活動を取り入れていることが分かる。さらに前田の子どもへの問いかけから、授業において子どものもつ感想を大切に、取り上げていたことが読み取れる。つまり前田は、子どもたちが体験的に学び、その学習に対して子どもたちが、自分なりの言葉で考えることを大切にしていたことが分かる。

そしてインタビュー16の二重線部では、前田が自分なり

に学力について捉えて話している。子どもが対象と関わりながら、自分なりの考えをもつ力、対象から自分の考えを見出す力を、社会科で身につける学力と捉えている。ここから前田の社会科の授業が、教材をいかに学ばせるかという視点からではなく、子どもの育ちをどうつくるかという視点から行なわれていることが分かる。

以上のことから前田は、「子どもありき」の授業を志向しながら、子どもが体験を通して対象と関わりながら、対象から気になることを見つけながら学ぶという「自ら学ぶ」という成長観を得させようとしたと考えられる。

これまでに示した挙母小での研究や実践の蓄積は、前田に附岡小の赴任を抵抗感なく受け入れさせている。前田は、自身が附岡小へ異動することになったときのことについて、次のように述べている。

インタビュー17

かなりそこらへん(先述した授業公開等)のところ、附属へ行ってからよりも、その辺のところの方が、自分でも一生懸命やったと思うよ。だから附属へ行っても何にもそう目新しくなかったな。なんにもそう、あ、こんなもんかという感じで、あんまり抵抗感なくて。

[2012年11月23日のインタビューより]

インタビュー17 から、附属小学校へ異動する際に目新しいことがなかったということに関して、三つのことが考えられる。一つ目は、子どもを軸にした授業に関わる研究が附属小学校でも取り組まれており、前田の教育観と近い実践であったということ。二つ目は、附岡小で行うような大単元の授業構想に、挙母小学校勤務時から取り組んでいたこと。そして三つ目に、研究に没頭するという習慣が身に着いてきたことが挙げられる。これらのことから、前田が附岡小での実践に必要な素質を身につけていたと考えられる。

2.3 愛知教育大学附属岡崎小学校勤務期 (1978-1985年)

前田は大学を卒業し中学校・小学校を一校ずつ経験した後、愛知教育大学附属岡崎小学校(以下附岡小と記す)に異動した。附岡小は生活教育の理念を底流として実践を展開しており、愛知県三河地方の力のある実践者たちが集められ、勤務している。

前田が附岡小に異動した時期は、校内暴力が話題にあがり始めた時期であり、学校が荒れるという現象が徐々に顕在化

する時期である。

前田は、附岡小での勤務について、「抵抗感がなかった」と述べたが、それとは異なる理由で附岡小での勤務に違和感を抱いていた。その理由を次に示す。

インタビュー18

附属の子というのは、エリートで、ちょっとええとこのおぼっちゃんというか、セレブというかそういう雰囲気じゃない。

[2013年8月23日のインタビューより]

インタビュー18 で前田は、自身が《貧しさの中での辛い生活》を経験した少年期・青年期と附属小学校の子どもたちを対比して捉えていると考えられる。この対比は、前田が附岡小で、「岡崎の二七市」「岡崎の石屋町」「雪国から来たおじさん」や「給食のおばさん」などの社会科の授業を構想したことに関連している。それらの材は共通して、地域や身近にいる、あまり世間から注目を浴びない人々との関わりがテーマに設定されている。これらの教材開発には、前田なりの子どもたちに対する願いがあった。前田は教材への思いについて、次のように話す。

インタビュー19

(自身が選出した材に共通することという)世の中の端っこっていうか、ちょっと埋もれてしまいそうな人ばかりですね。……(貧しい印象があったり、地味であったり、目立たない存在であったりする)そういう名もない人たち……エリートじゃない人たち、エリートじゃない人たちを会わせたいと。……(子どもたちには)そういう露天商のおじさんや出稼ぎのおじさんなんかを、簡単に馬鹿にしてほしくない。馬鹿にするというか軽蔑するとか、……あの人たちの中には生き方としてすごいところがあるんだということを、子どもたちに分かってほしい。そういうことはすごくあったわけ。

[2013年8月23日のインタビューより]

インタビュー19 で前田は、子どもたちの生き方と教材とした人々の生き方について対比しながら捉えている。そしてインタビュー19 下線部から前田は、社会科の学習を通して子どもたちが自分とは異なる人の生き方を見つめ、他者の生き方を認めることができるような学びを期待していたことが分かる。さらに次に示すインタビューで前田は、自身が選

んだ教材に対する思いについて付け加えている。

インタビュー20

そういう点では附属の子たちのようなエリート属に、そのエリートの学習だけをさせるんじゃないで、そういう世の中の吹きだまりのところにいきとる人たちのように見える、だけどその人たちの中にどうい生きがいとかやりがいとか、そういうのを学ぶことによって、……(筆者中略)……あの人たちって、すごい生き方をしている人たちなんだよということが、子どもなりに学んで欲しいということが、私の中にあった。それが教材への思いだよね。

[2013年8月23日のインタビューより]

前田は挙母小に勤務している間に、「対象と関わる中で何かを見つけ、それを自分なりに解釈する力」(インタビュー16参照)が社会科で身につけるべき学力だと考えている。そしてインタビュー19に加えてインタビュー20下線部からも、子どもが他者の生き方のすごいところを子どもなりに「見つける」ことを学習の課題として設定していることが分かる。ここから前田は附岡小での実践において、子どもたちが他者の生き方を見つめることで、自分自身について見つめ直す力をつけようとしたと考えられる。しかしそれは、あくまで《「子どもありき」の授業》でなければならないことも、「子どもなりに学んで欲しい」という語りから明らかである。

前田は子どもの育ちへの願いを教材に託す一方で、教材と子どもの関わりについて冷静に判断しようとしている。それは、授業や教材がどのように子どもに影響を与えたか、授業や普段の生活における子どもの具体的な姿から見とろうとする考えに明らかである。そのことをインタビューで次のように述べている。

インタビュー21

だけどそれ(世の中の吹きだまりに生きる人の生き様について学んでほしい)は私の想いであって、それが子どもに本当に伝わるかどうか、子どもが本当にそういうことを学び得るかということは、私が勝手に判断するんじゃないで、授業の記録の中での子どもの発言とか、子どもの書いた作文とか授業後の感想とか、そういうものを見てこの子たちが何から学んだのかを判断しないことには、ね、おかしいでしょ。

[2013年8月23日のインタビューより]

インタビュー21から前田が、自分の授業や教材がどのように子どもの姿に影響を与えているのか、あるいは与えていないのかを、多角的に捉えようとしている。子どもの具体的な学びの姿に基づいて、客観的に授業や教材の在り方を問うていることから、前田が《「子どもありき」の授業》を行なっていることが読み取れる。前田は、録音した授業を文字起こして記録にとどめたり、子どもの作文や調べたことを自身の手で写したり、要約したりすることで自身の実践記録を作成している。前田は実践記録を綴ることで、複数の授業における子どもの考えつながら、子どもの育ちや授業の在り方について長期的な視点で検討していた。

3 現在の教育観

ここからは、前田の現在の教育観について示すこととする。本稿でこれまでに示したのは、前田の教育観の基礎的な要素や、授業に関わる教育観の転換の様子を描いたライフストーリーである。ここではそれらのライフストーリーが、現在の教育観とどのような関わりをもつのか、考察したい。

前田の現在の教育観を表すために、前田が現在著作に記す言葉から二つを抜粋して示す。

◎ 授業というバスに乗ろう¹⁵⁾

前田の教育観を表す言葉として最も代表的なものが、この「授業というバスに乗ろう」である。この言葉には、様々な意味が含まれている。その意味について、以下に整理して示す。

「授業というバスに乗ろう」は、授業は全員参加であるべきだという考えを表している。授業をバスに見立て、運転手を教師、子どもを乗客とすると、教師は子どもが全員乗車するまでバスを止めなければならない。もし子どもが途中でバスを下車しそうになったら、もう一度バスを止め、子どもを乗車させなければならないという考え方である。この考えを基本として、教師の役割・子どもの育ちに分けて考えてみたい。

「授業というバスに乗ろう」を教師の立場から考えると、教師は子どもが授業に参加できるように、授業での子どもの様子を捉え、授業に参加させるために工夫を施さなければならないことを示している。例えば、授業中に分からなくなってしまった子のためにバスを一度停車させるなどの工夫が挙げられる。このことは、前田のライフストーリーにおける《弱者の立場に立つ》というキーワードが関連していると言

える。

そして「授業というバスに乗ろう」を子どもの立場から考えると、子どもは自分からバスに乗ろうと意欲をもたなければならないことが示されている。自分から学ぼうとし、授業に参加しようとする子どもの育ちが、「授業というバスに乗ろう」という言葉に込められている。このことは、前田に《「自ら学ぶ」という成長観》があり、それを子どもたちが身につけることに価値を見出していることが関連している。

◎ 教室はまちがうところだ¹⁰⁾

この言葉を著書で用いるとき前田は、蒔田晋治氏の詩である「教室はまちがうところだ」を引用しながら述べている。本稿でも、その冒頭を引用しておきたい。

表 3

「教室はまちがうところだ」
教室はまちがうところだ
みんながどしどし手をあげて
まちがった意見を 言おうじゃないか
まちがった答えを 言おうじゃないか

〔蒔田晋治 作・長谷川知子 絵『教室はまちがうところだ』、子どもの未来社、2004年、2頁より引用〕

表3に示した詩にもある「教室はまちがうところだ」という考え方には、前田の「授業というバスに乗ろう」という考えが深く結びついていると考えられる。子どもが自分から学ぼうとする背景には、教室での子ども同士の関係や教師との関係が、例えばまちがった考えや答えを言ってしまうと、受容されるような環境がなければならぬと言える。そのため普通の学級づくりから「教室はまちがうところだ」という意識づけがなされることによって、子どもが授業への参加意欲を高めることができると考えられているのである。

以上が前田の教育観を代表する言葉と、筆者は捉えている。これらの考えには前田が、子どもが自ら考え学びへと向かっていく姿、子ども同士が学び合い、学びを深めていく姿を期待されている。このような前田の考えには、教育観の根底を支えるライフストーリーがあることが、キーワードとの関連などから明らかである。

おわりに

本稿では、前田勝洋のライフストーリーに着目して、教育観の形成と転換の契機に着目して論じてきた。前田のライフストーリーへの解釈から、前田の教育観形成の根底には、《弱者の立場に立つ》《貧しい中での辛い生活》《生き方の模索》《「自ら学ぶ」という成長観》があることが明らかとなった。そしてこれらは、現在の前田の教育観を支えているキーワードでもある。

そして前田の教育観を転換の視点から見ると、挙母小に勤務していた時期に出会った東郷東小学校・鈴木仁志教諭の実践を初め、社会科の初志をつらぬく会の実践家・研究者たちとの出会いが契機として挙げられる。またそれらの出会いを契機として、前田は堀川小や安東小など授業研究会へ参加したり、これまでの自身の学びを振り返ったりすることで、自身の教育観の深化・発展させていったと言える。

本研究から、一人ひとりの教師には、その教育観の根底を支える人としての育ち、教師としての育ちがあることが明らかとなった。教師が自分の実践を振り返りながら自己の生き方を振り返ることで、同時に自分の教育観の根を探ることは、一人ひとりの実践の展開に大きく関連しているのではないだろうか。

注・引用参考文献

- 1) これらの研究はグループ・ディダクティカ編『学びのための教師論』（勁草書房、2007年）に所収されており、森脇健夫「教師の力量としての授業スタイルと形成」167-192頁、吉永(岩崎)紀子「子どもの育ちを語り合う学校で教師が育つということ」139-165頁を参考に筆者が記した。
- 2) 例えば、船越勝・森教二「森教二のライフストーリー研究-和歌山県における生活綴方教師の一典型-」、『和歌山大学教育学部紀要・教育科学62』（2011）が挙げられる。
- 3) 高井良健「教職生活における中年期の危機-ライフストーリー法を中心に-」『東京大学教育学部紀要 第34巻』、1994年、326頁を参考にした。
- 4) 佐藤健二「ライフストーリー研究の位相」、中野卓・桜井厚編著『ライフストーリーの社会学』、弘文堂、1995年、20頁より引用
- 5) 前掲書4、19頁より引用
- 6) 前掲書4、20頁より引用
- 7) 前掲書4、21頁より引用
- 8) 前掲書4、22頁より引用
- 9) 前掲書4、24-26頁を参考に筆者がまとめた。
- 10) これについては、上田薫監修・渥美利夫著『小学校社会科の授業④ 交通の変遷』（1984年、国土社）に実践の記録が掲載されている。
- 11) 上掲書10、118-119頁より引用
- 12) 前掲書10、119頁より引用
- 13) 前掲書10、119頁より引用
- 14) 前掲書10、120頁より引用
- 15) 前田勝洋著『教師の実践する力をきたえる』、黎明書房、2009年、60頁より引用
- 16) 前田勝洋・実践同人たち著『学級づくりの力をきたえる』、黎明書房、2008年、19-22頁より引用